

# 公同礼拝

2022年7月24日(日) 午前10時30分  
午後3時

司式 牧師 姜 匠米

前 奏

招 詞 詩 編 29編1b、2節

讃 詠 546

主の祈り

聖 書

イザヤ書 42章18～20節 (旧1129)

マタイによる福音書 9章27～34節

(新16)

祈 禱

使徒信条

讃 美 歌 286 (1)

説 教 「信じている通りに」

牧師 高橋和人

祈 禱

讃 美 歌 338 (1)

献 金

頌 栄 542

祝 禱

黙 禱

## 7月の祈り

父なる神、御子主イエス・キリスト、聖霊の三つであり、一つのお方の恵みによって、体と命を授かり、救いと赦しを与えられ、今この時に神と共に歩む勇気が与えられるように。

御言葉を糧として生かされ養われていることを覚え、人の言葉に惑わされず、神の言葉を求めることができるように。

世界が主の御心が平和であることを意識し、平和を求め歩み出すことができるように。

経済的、社会的に弱い立場の人々や子どもたちが守られるように。

## 今日の祈り

この世界に対する主なる神の真理の御言葉の宣教の使命を果たすことができるように。

コロナ感染の再拡大の中で、礼拝と信仰の生活が守られ、力づけられるように。

体調を崩している人々、重荷と不安を負っている人々のために。

「信じている通りに」 高橋和人

マタイによる福音書 9:27～34

二人の盲人が叫びながらついてきた。「ダビデの子」はメシアの称号であり(12:3、15:22)「憐れんでください」と叫ぶ。彼らは主イエスをメシアと見込んで救いを求める。当時、盲人たちを守る手立てはなかった。差別され、疎外され、取り残された。

彼らの世界は閉ざされていた。しかし彼らの耳は開かれていた。主イエスの言葉を聞くことができた。そこには格差はない。むしろ、敏感に主の言葉ある力を知ることになる。

そこで、彼らは「憐み」を受けることを願った。そして、ひたすら主について行き、家の中に入りそばに寄ってきた。必死であった。

主イエスは「わたしにできると信じるか」と言われる。それは主イエスに対する信仰のみを問う問いである。憐みを求めるものに、主が憐れまれることを信じるかと問うのです。聖書に一貫した神の姿は憐みと慈しみである。

パウロは「神はモーセに、『わたしは自分が憐れもうと思う者を憐れみ、慈しもうと思う者を慈しむ』と言っておられます」(ローマ9:15)という。主の憐みと慈しみに救いの根拠がある。それは、神が憐みを求めるものに心動かされるからだ。それは盲人たちには明白であった。主の憐みこそ拠り所となる。

主の問いに対して「はい、主よ」と答える。マリアもまた同じく答え、メシアを告白した(ヨハネ11:27)。ラザロはよみがえり、盲人たちは見えるようになった。主はこれを語ることを厳しく止めた。信仰は結果によって信じるのではないからだ。主の憐みこそ救いだからだ。

恵みとして与えられたものも、失われる時がある。主が生き返らせたものも死を迎える。神の憐みは人生そのもので受け止められなければならない。受け止め、確め、深め、成熟される。信仰と不信は紙一重に揺れ動く。見えるものによらず、見えないものによって信仰は養われる。

ファリサイは、自らの努力によって救いに到達しようとする。そのため、救いの根拠が神の憐みであり、救いの主体が神にあるのに、自分を挟み込む。それゆえ恵みとしてあたえられたものを認めることができない。